

中国における最近の義和団研究の動向

——中国近代史における農民闘争の位置づけの変化——

石 田 米 子

1. 近代史における農民闘争の位置づけ

近三、四年の中国における中国近代史研究に現われた新しい傾向は、いくつかの点からそれを指摘することができる。きわめて着実な実証的研究がふえたこと、一つの問題についてさまざまな対立する見解が発表されること、などがそれだが、そのさまざまな見解の中にも全体として一つの新しい傾向があり、また文革以前にもなかった新たな見解が私たちの注意をひく。

全体としていえることは、近代史における資本主義の発達への関心が強まり、ブルジョア階級の歴史における積極的役割を再評価しようとする、農民と農民闘争の限界性に目を向けようとする、などが一つの傾向としてあり、とりわけ文革期の近代史のとらえ方とはかなり違ってきた。李時岳「従洋務、維新到資産階級」¹⁾や劉耀「中国近代史研究中的幾個問題」²⁾などの論文が、近代史の全体像のとらえ方の変化を示す代表的論文といえる。李時岳氏は、近代史を四つの段階に分けてとらえることを主張しているが、その四段階とは、太平天国・洋務運動・変法維新運動・辛亥革命ということである。文革以前の近代史時期区分論争以来、近代史を三つの「革命的高揚（革命高潮）」、つまり太平天国・義和団運動・辛亥革命の流れでとらえる見方が一般的であったが、その見方に異議がとなえられているわけである。80年春、北京において開かれた、何人かの著名な中国近代研究者による義和団に関する座談会において、³⁾ 林増平氏は、義和団を中国近代史における第二の革命的高揚とする従来の見方に対して次のように発言している。

——しかし、義和団運動自体についていえば、

人びとは次のような疑問を持たざるをえなかった——まさか中国人民が36年間（太平天国の敗北から義和団まで）も思想的準備と力量の蓄積を行なって、そのあげくになんとあのように組織性のない、指導思想を欠いた、まったくもって自然発生的な散漫な革命的高揚を引き起したというわけでもあるまい。事實は、19世紀60年代以後中国社会の中で成熟していった変化は別の運動であったのであり、それははかならぬ中国資本主義化の運動であったのである。

林増平氏はこうして李時岳氏と同じような見方を出し、かつて林氏が義和団を第二の革命的高揚とする見方に賛成したことを撤回し、このような見方への反対を表明している。

このような見解に対しては、反対意見もかなりあることは、昨年末の広州における「孫中山与辛亥革命」討論会の報告によっても知られるが、⁴⁾ 近代史を太平天国・義和団・辛亥革命期の民衆運動（その主力としての農民運動）の流れを軸にすえて、それとの関連において全体的にとらえようとする見方——筆者自身はそうに近代史をとらえてきたし、今でも基本的にその見方を変えていない——は少くとも押し戻されていると考えられる。

論文の数からいえば、太平天国と辛亥革命に関するものが圧倒的に多いが、以上のような見方に関連して、洋務運動・変法運動の関係の論文もふえ、再評価が行なわれている。とりわけ洋務運動の評価については文革以前に戻ったという以上のものがある。従来その反人民性・買弁性のみが強調され、頑固派との闘争は同類同士の争い（狗咬狗の闘争）とみなされてきたことに対し、批判が

行なわれ、全体の、あるいは時期により人による積極的役割の評価がなされている。資本主義の発達という、工業における新しい生産様式、生産管理の問題に注意が集中し、また制度改革に関心が向くことは、当然ではあるが気にかかるところでもある。農村における資本主義の萌芽問題は、関連する論文も散見されるが、⁵⁾ 近代史の全体像との関係はいまひとつつかみにくい。

実のところ、日本にいる私たちが中国における学界動向をつかもうとする時、全国誌・紙をどうしても中心において考える。最近では地方の連合会誌や学報がかなり入手できるようになったが、私たちが見ているのは、部分に過ぎないという不安がいつもつきまとう。しかし、少なくともその範囲では、中国の学界動向はやはり今日の中国の政治的課題・政策と密接に関わり、連動している。生産力の要素の重視、封建残余の克服、農民的平均主義（農業社会主義思想）や皇権主義批判等の今日の課題・政策は、最近の近代史研究の傾向に明確に表われている。逆にいうと、近代史研究のあり方から今日の中国の国づくりのあり方を考える契機を得ることもできるのである。そのような中国の歴史学のあり方は基本的には変わっていない。それは歴史学が本来的に負っている性格ではあるが、中国では政治との関係がきわめて直接的であることは、良し悪しは別としてそれ自体中国の歴史の特質でもある。

2. 文革をはさんだ義和団研究の変化

義和団運動に関しては80年1月に近数年30篇余りの論文が発表されたといわれている。しかし筆者は今日（10月）現在25篇ほどしか見ていない。11月に開かれる義和団80周年学術討論会ではさらに多くの研究発表が行なわれるであろう。それをまてば研究動向はもっと具体的にわかるだろう。日本その他外国の研究者との討論成果も期待される。しかし、ここではとりあえずこの20篇余りの

論文から、中国の義和団研究が問題にしていることを整理してみたいと思う。

丁名楠氏は先の義和団座談会で、中国における義和団研究の歴史を、解放前・解放後・そして文革後の最近と三段階に分けて整理しているが、⁶⁾ この解放後文革までの義和団研究は、義和団の反帝愛国運動としての性格を積極的に肯定し、中国の革命的情勢（革命形勢）の発展を促した近代史における第二の革命的高揚とみなすものであった。60周年記念論文集は、⁷⁾ 文革前の研究成果を示している。ここでは義和団は革命運動だが自然発生的（自発的）なものであり、したがってその反封建的性格については弱点が指摘され、プロレタリア階級の指導のない農民闘争は必ず敗北すると結論づけられていたが、しかし、義和団の蒙昧性・落後性を強調する見方には批判的であった。それまでの、拳匪・拳賊的な見方との闘争の課題があった。文革期には、義和団の客観的役割の評価のみならず、義和団の主体の評価、主体の思想の評価がきわめて高くなった。この時期の義和団運動の叙述はまことにいきいきとしていた。⁸⁾ これらの叙述では文革前に収集・編集・刊行された歌謡や故事や貼り紙などが大いに活用され、⁹⁾ 支配者側の残した資料が描きえない世界を私たちの前に展開してくれた。丁名楠氏及び他の人びとは文革期には義和団の革命性はプロレタリアートにもまさるという誤った主張がなされたと述べているが、そのような議論があったのかどうかを筆者は知らない。しかし、プロレタリア階級の指導のない農民闘争は必ず失敗するという結論を必ずしも常に述べていなかったことには注目していた。周知の戚本禹論文「愛国主義還是売国主義？」¹⁰⁾ が発表されてから、義和団の欠陥を指摘することはタブーとなったと今日言われているが、義和団主体の肯定的面のみが高く評価されたのは事実である。義和団や紅灯照（若い女性の義和団）が当時の紅衛兵と二重写しになっていった。「4人組」が倒

されてから“大衆運動自然合理論”批判なるものがなされたが、今日を含む歴史上の大衆運動の自然発生的革命性を過大評価することは無政府主義を肯定するものとされたのである。実証抜きの大衆運動美化への批判は当たっている面もあり、考えさせられる面もあったが、文革期の、主体に即した義和団評価、新たに光をあてられた義和団の主体性・創造性を、紅衛兵運動とともに否定し去ろうとする傾向には納得しがたいものがある。

「4人組」が倒されて間もなく文革期の“史学革命”が批判され、戚本禹氏の翦伯贊批判が批判されたが、「愛国主義還是売国主義？」の正面からの批判が始まったのは79年末からである。¹¹⁾ いわゆる義和団研究の“タブー”が破られ、実事求是と全面的評価が主張され、さまざまな視点からの義和団研究と義和団論が出てきた。これまで、義和団を反帝反封建の革命運動ととらえてきたことについて、限定が加えられ、また異議も唱えられ、論争が起っている。義和団の反帝運動としての役割を否定する意見はないが、その反封建性については多くの否定的意見が出され、また反帝性についても、毛沢東のいった「漠然とした排外主義(籠統的排外主義)」¹²⁾ という規定を持ち出して反帝性の質をきわめて限定的にとらえる意見が多く出されている。こうした議論と関連して、或いはそのような議論とは関わりなく、かなり実証的な手がない研究がふえているのは新しい傾向であり、その中で、日本では未だ見ることのできない資料が使われたりして、新しい事実が明らかにされてきていることは注目される。

実証的研究で新しい展開が見られるのは、義和団と清朝内部の諸勢力との関係に関する研究で、これは義和団の反封建性に関する議論と共に深められている。また、義和団源流に関する研究でも実証的研究がすすんでいる。¹³⁾ この問題では日本でも市古宙三・村松祐次・佐々木正哉氏らの研究と議論が戦後の早い時期からあるが、義和団にお

ける反乱の結社が、太平天国・捻軍等の革命的伝統をどのように継承しながら形成されていったのかという問題として注目される。義和団がどのように革命的伝統を継承し、次の時代にそれを引き渡したか、という観点は、最近の中国の義和団研究の中にはあまり見られない中で、¹⁴⁾ 四川省や浙江省の華北以外の地域での同時期の同質の農民闘争を扱った研究が、義和団とブルジョア革命派・辛亥革命との関係を論じていて面白い。¹⁵⁾

一方、79年1月の義和団の民主主義的性格と大衆的性格を評価した張玉田氏の論文や、¹⁶⁾ 帝政ロシアの侵略と闘った東北の義和団に関するいくつかの研究は、¹⁷⁾ 今日的課題にこたえようとする義和団の積極的評価と見られるが、全体から見ると、文革、文革期の紅衛兵運動、大躍進・文革における農民の創造性・積極性への高い評価に基く政策と運動への批判・反省が義和団研究に直接持ち込まれ、きわめて厳しい否定的評価を出している研究が少なからず見られる。以下に、義和団評価問題の最近の動向を簡単に紹介してみよう。

3. 最近の義和団評価

——反封建性と排外主義をめぐる

義和団の反封建性を、皇帝・貪官汚吏への攻撃という面から依然として積極的に評価するのは、比較的古くから活躍していた研究者のように思われる。¹⁸⁾ それに対し、皇帝・貪官汚吏への攻撃といっても、それは光緒帝と洋務派・変法派への攻撃であって、それは義和団と西太后派の結合を示しているのにすぎない、反封建性の根拠としている故事・歌謡・貼り紙等の収集・引用の方法に問題がある、義和団は帝国主義と清朝の関係を認識しえず、清朝を打倒しようという目標を掲げ得なかった、それどころか、仲間の白蓮教徒を謀反をはかったとの理由で殺害することによって清朝への忠誠の証とした、土地問題・政権問題を提起しえず、反封建綱領を持たなかった、というような

点をあげて反封建闘争とはいえないとする意見を出しているものが多い。¹⁹⁾ 清朝頑固派に利用され、それとの結合が強まるのは主に北京入城以後として時期を分けて論じているものが少なくないが、北京入城後の義和団を集中的にとりあげて義和団主体の限界性を分析するものもある。²⁰⁾ また、義和団全体を一様にとらえるのではなく、いくつかのグループに分けて考察する——山東義和団と京津義和団を別のグループととらえる、²¹⁾ あるいは義和団公認・清朝宣戦布告後、義和団はさらに多くのグループに分れたとみる²²⁾——研究もいくらかあり、その中で最も明快なのは、義和団を「扶清滅洋」グループと「神助滅洋」グループに分け、それぞれの階級的基盤を中小地主層抵抗派と農民に求める見解である。²³⁾

日本の義和団研究では野原四郎氏にせよ小林一美氏にせよ、義和団を一様の不変のものとは見ていない。故事や歌謡にあらわれる「真団」と「偽団」のような性格の異なる義和団の諸グループを見、その中で清朝との結びつきの弱い民衆的反官的な義和団の運動と思想を、革命的伝統の文脈の中でつかみ出し、義和団の本来的なもの、次の時代に引き渡されるものを見出そうとしている。それは上記の階級的に二分するというような方法ではなく、農民の中の矛盾とみなされているように思える。²⁴⁾ 「扶清滅洋」が義和団全体を蔽う、義和団に本来的なスローガンであるかどうか、日本の研究においても意見の差があるが、里井彦七郎氏はこのスローガンへの発展を戦術的に積極的に評価され、竹内実氏や小林氏は、この“清”は中国・江山・社稷の意で、清朝という王朝を意味しないとされる。野原氏は、「保国滅洋」こそ義和団の本来的なものとされる。中国の最近の研究では、「扶清滅洋」を義和団全体を蔽った代表的スローガンとみなしている論文が多く、その“清”の内容を文字通り清朝、あるいはもっと具体的に頑固派ととらえている（丁名楠氏が竹内・小林両氏と同様の

意見であることは注目される）。「扶清滅洋」が、民族的矛盾の尖鋭化の表現であることは誰もが認めるが、このような盲目的ないしは漠然たる排外主義のスローガンが清朝支配体制の認識をくもらせ、頑固派に利用され、結局は反帝の目標も達成できずに敗北する悲惨な結果を必然的に生んだ、と、「扶清」スローガンの役割の評価はほぼ全面的に否定的である。清朝内部の動向を研究している廖一中氏は、アヘン戦争当時のような清朝内部の抵抗派・中小地主の抵抗派の役割を評価し、それとの関連でこのスローガンを検討しているが、これは新しい観点である。²⁵⁾

「滅洋」のスローガンについては、民族的矛盾の表現ととらえられ、そのスローガンによる闘争の正当性・必然性が評価されるが、漠然たる、あるいは盲目的排外主義は上述の如く評価され、この排外主義の基盤は何か問題にされている。排外主義は勿論帝国主義の侵略がもたらした直接の結果として生れたものだが、また、封建制度の必然的産物であり、自給自足の自然経済が排外主義の基礎であり、農民小生産者の大海が排外主義の温床だとする意見が出ている。²⁶⁾ そして、封建的生産様式、生活様式に合わぬものを全て否定しようとする小生産者＝農民の封建的蒙昧性・落後性、狭隘な視野が批判される。²⁷⁾ この議論では、鉄道・電柱・汽船等を破壊したことも義和団の蒙昧性・落後性ととらえられる。この議論には筆者もショックを受けた。当然これに対しては反論があり、鉄道破壊は抗日戦争でもやった、それをも否定するのかとの意見が多く出ているようである。²⁸⁾ その反論に対しては、義和団は八カ国連合軍が来る前から鉄道をこわしていた、それは抗日戦争の時の鉄道破壊、八カ国連合軍が来てからの鉄道破壊とは目的が違い、後れたものだという再反論まで出ている。

4. 王致中論文

こうした義和団主体の蒙昧性・落後性を強調し、それを農民の「先天的落後性」「小生産者の文化的蒙昧性」として理解し、義和団の闘いは「奉旨造反」であり皇権主義思想に染まっていたと見、その客観的役割をも消極的にしか評価しない、あるいはさらに義和団によって被害を被り、重大な血の代価を支払った民衆の存在を指摘する研究の出現は、確かに新しい問題である。このような傾向はかなり多くの研究に見られるが、代表的な論文は王致中氏の「封建蒙昧主義与義和団運動」²⁹⁾である。王氏の論文では上述の如き見解が展開されているが、読み進んでいくうちに、義和団・紅灯照は紅衛兵、西太后は林彪・「4人組」あるいは毛沢東、洋務派・変法派は現代化推進派と次第に重なって理解されてくるのを如何ともしがたい。義和団はその落後性と蒙昧性のために利用された、西太后は宮院内権力闘争のために大規模な大衆運動を利用し、歴史に逆行しようとした、義和団は頑固派の支持を受けており、絶大な権力をもっていた、大衆は自由意志で義和団に入ったのではなく、入らなければ生命が保てなかったのだ、等々は、まさしく文革批判なのである。論文の最後に至り、ある納得がついた。王氏は1945年生。文革の時20歳を越えたばかりである。義和団の消極的側面ばかり述べたが、決してその反帝性を否定しているのではない、このような論文を書いたのは「新しい蒙昧」を脱脚し自分自身と同時代の青年が十数年前林彪・4人組に愚弄され騙されて犯した誤りを清算せんとするためだと記している。方法の問題からいえば、まさに戚本禹論文のちょうど裏返しということになる。

『歴史研究』という中央学術誌に載ったこの論文に対し、当然予想される直接の批判は見られないのだが、丁名楠氏が先の座談会で、名指しではなく、王氏のような見解に対する批判的意見を述べた。その意見に対して、王氏が反論し、それへの回答という形で丁氏が王氏に対する批判を展開

した。この両意見は、『光明日報』に同時掲載された。³⁰⁾ 抗日戦争と人民解放戦争を経験し、拳匪・拳賊的帝国主義的義和団観と闘争することによって自分たちの闘っている反帝大衆闘争の正当性を主張してきた世代と、そのような体験を持たず、党と政府の方針の急角度の変化の中で苦悩してきた若い世代の違いが、深い印象を残す。

しかし、王氏にもそういう面があるが、若い研究者の中には、立場を重んじるがいささか粗っぽい実証による、思い入れの多い古い世代の議論に対して批判的で、資料を丹念に読み、実証的に攻めていくタイプの研究者が生れていることも、先に述べた如く事実なのである。王・丁論争の中で、范文瀾氏以来、³¹⁾ 丁名楠氏も含めて、中国の近代史研究者が義和団の反帝運動としての役割、帝国主義の中国分割の企図に対して与えた大きな打撃を証明するのに、ワルデルゼーやハートなどの見解を有力な根拠にしてきたことに対し、王致中氏が批判を加えている。王氏の他にも同様の議論を展開している人びとがあるが、³²⁾ 彼らは、数人の「帝国主義分子」の議論だけから義和団の役割を論ずるのは不十分であること、ワルデルゼーの見解だけをとりとめても、その主張の全体を客観的に読めば、帝国主義諸国間の矛盾を中国分割が不可能である主要な原因とみなしており、義和団のような反抗は確かに原因とみなされているが主要なものとはみなされていないこと、などを主張している。彼らは、当時、日本にも欧米にも分割論に対して保全論があり、主として列強の勢力均衡が分割を不可能にしたのであるとし、義和団が帝国主義に与えた打撃を過大に評価すること、ましてや分割の企図を「阻止」「粉碎」したなどというのは誤りである、とする。これに対して丁氏は、帝国主義分子の発言だからといって一概に否定してはならない、当時の『開智録』にのった中国のある革命派の文章「義和団の中国に対する貢献について」³³⁾を除くと、当時の中国には義和団は国

家と人民に禍いをもたらすものであったという議論しかなかったが、我われはそのような議論を信ずることができるだろうか、と反論している。丁氏には王氏の議論はどうしても解放前の義和団論と重なって受けとめられ、王氏はそのように決めつけられることに不満を表明しており、議論がかみあっていないのである。最近の日本の学界にも類似の状況がある。

5. いくつかの問題点

先に、ある限定された問題を限定された限りで丹念に実証していく新しいタイプの研究が最近現われてきたことについて述べたが、辛亥革命研究などでも、このような研究の中に非常にすぐれた面白い論文が出てきている。しかし、限られた問題を、その限りで文献資料を並べることによって説明しようとするのみで、歴史の文脈への洞察を欠いた「実事求是」に終始する論文も目につくようになってきたことは否めない。まるで日本の東洋史学における近代史研究の一つの傾向にも似て、実証が細くなればなるほどそこに描き出される歴史像が、きわめて静態的で古くささばかり目につくものとなる。いや、中国の「実事求是」は日本の実証主義の無自覚性とはちがひ、前提に明確な問題意識・立場があるのだ、という意見もあるかもしれない。あるいはそうなのかもしれないが、当時の革命派や変法派の新思想に基準を置いたり、あるいは後のプロレタリア階級に指導された革命運動に比較したりすることで古さを問題にしていけば、実証にはことかかない。そのことによってプロレタリア階級の指導の歴史的意義を明らかにすることは確かにできるかもしれないが、それで歴史の何かが明らかになるのだろうかと思うのである。

日本の義和団研究では、市古氏らが実証主義的研究によって義和団の古さや迷信性を強調してきたが、里井彦七郎氏は、義和団の古さや迷信性を

認めたうえで、運動の過程におけるその克服について論じ、義和団の中に近代のかがやきを見出そうとした。小林一美氏は、里井氏のように義和団民衆の意識を近代の高みから分析してその全体像を失わせ、民衆の感性的世界を克服すべき非合理的迷信的なものとしてとらえることに反対し、義和団民衆の意識の総体の中に「民衆の威信の満面開花」を見る。古いもの、非科学的非合理的なものともみなされてきた民間信仰やいわゆる迷信、土俗的な結社による民衆の結びつきの中に、その古さを肯定した上で、帝国主義を全身で受けとめ迎え撃とうとする民衆のエネルギーと創造性を見出そう、それを中国の革命的伝統の中で考えていこうとする義和団へのアプローチが、小林氏以来、日本では育ってきている。反乱における民間信仰や結社に対する関心が強いのもそのためだが、中国ではそれほど強くはない。ブルジョア的乃至はプロレタリア的政党の理論からみて非合理的なものは、迷信的な、後れた、克服すべきものである。王致中氏のように、義和団の迷信性が民衆に血の犠牲を強いたという見解もある。義和団の古さ、いわゆる迷信性については、里井・小林両氏の対立に見られるように、一種世代的ともいえる評価のズレが日本においてもあるが、日中間のズレにも歴史的体験のズレ、封建制の体験と近代化への期待のくい違いがあるように思える。

中国の論文を読んでいていつも感ずることは、“自然発生的（自発的）”運動であると規定するか否かが、一つの運動の評価として決定的に重要だということだ。最近の中国の農民戦争論では、農民はブルジョア階級かプロレタリア階級の指導がなければ自覚的には封建制度に反対しえない存在であるということが、殆ど全ての研究者によって再確認されている。³⁴⁾時にはこの結論を実証するために論文を書いているのではないかとさえ思うこともある。「プロレタリア階級の指導なき農民闘争の悲惨な結末」も歴史的事実であったがし

かしました、自然発生的な大衆運動が、いかに古めかしかりと大衆にもっともふさわしいやり方でそのエネルギーを引き出し、大衆の創造性を解放し、時代の問題の焦点を人びとの前に明らかにし、人びとを励ますことによって、歴史の局面を切り拓いてきたことも歴史的事実であった。自然発生性の中に自覚性の深まりがあり、自覚的運動も自然発生的要素が無ければ、大衆的創造的運動とはなりえない。自然発生性とは蒙昧性とイコールなのではない。

このような当り前のことを敢て強調してみたいようなことがあるのである。例えば、義和団が自らの運動の方向を「扶清滅洋」のスローガンで示そうとしたことは、当時の客観的階級関係を十分自覚的に認識していなかったことの表われであるというのは確かに当たっている。しかし、その義和団の闘いを通じて清朝の役割が人びとにより自覚的に認識されることになったのである。「扶清滅洋」をのりこえる、例えば「掃清滅洋」の運動が起ってきたのは、やはり義和団の闘いを経たからである。また、正面・反面から衝撃を受けた革命的知識人・革命家を媒介として、義和団の経験は次の時代の農民運動・大衆運動に引き継がれていく。つまり、義和団運動の革命思想への反映、のちの革命への継承があるのである。いくつかの論文を除くと、この面が重視されなくなったのは気にかかることである。農民はいつも啓蒙される対象であり、農民闘争に内在する発展過程、継承関係は、先の林増平氏の発言にみられるように、太平天国以後あいまいになってきた。「同盟軍」はそれ自体の発展過程を持たぬというわけではないと思うが。

農民を啓蒙の対象とする考え方が強まっている中で、小生産者＝農民の先天的「愚昧性」「蒙昧性」「落後性」などという言葉がこんなにも堂々と使われるようになったことに驚きを禁じえない。農民思想としての平均主義について最近多くの議

論があり、見解は分岐もしているが、平均主義が克服すべき非プロレタリア思想であるとの考え方では大かたの意見は一致しているようである。農業社会主義思想の批判・克服の課題と連動して論じられている。歴史上の農民とその思想・運動に、かくも厳しい、消極的評価があらわれてきたのは、「農民の積極性・創造性に依拠する」ことを最大限に標榜した運動の挫折の深刻な経験の歴史研究者への反映であろうが、このような農民観は決して一部の歴史研究者だけのものではないはずである。ある18歳の中国人留学生が、第二次世界大戦で日本が敗北したのは、中国の抗日戦争を含むアジアの民衆の抗日運動による、という見解は親たちの世代の見方としてあるが、自分はやはり、原爆に代表されるアメリカの近代科学と民主主義に負けたのだと思う、と語って筆者の度胆を抜いたことがある。彼は中国を代表して発言したのではなく、ごく自然に私見を述べたのである。このような歴史観をもつ青年が、幹部・知識人として育ちつつある。資料をほしがるだけでなく、中国のこれからの近代史研究とどこに交流・議論の接点を求めていくかは、大変な問題である。

注

- 1) 『歴史研究』80—1
- 2) 『社会科学戦線』80—2
- 3) 「如何評価義和団運動？」『光明日報』80. 5. 27。発言者——章開沅, 丁名楠, 戴逸, 湯志鈞, 李侃, 林增平, 陳慶華, 阮芳紀
- 4) 段雲章「孫中山与辛亥革命學術討論会紀要」『中国社会科学』80—1
- 5) 劉輝「從長江中下游地区農村經濟的變化看太平天国革命的歷史作用」『歴史研究』79—6など
- 6) 同注3)
- 7) 中国科学院山東分院歴史研究所編『義和団運動六十周年紀念論文集』1961
- 8) 上海人民出版社の“中国近代史叢書”の中の

『義和団運動』1971がよい例である。

- 9) 河北省民間文学研究会編『義和団故事』1960, 程英編『中国近代反帝反封建歴史歌謡選』1962など。
- 10) 『紅旗』1967—5
- 11) 左歩青・章鳴九「評戚本禹的《愛国主義還是売国主義?》」『歴史研究』79—12, 楊東梁・王俊義「評戚本禹的《愛国主義還是売国主義?》」『光明日報』79. 12. 11
- 12) 毛沢東『新民主主義論』
- 13) 李世論「義和団源流試探」『歴史教学』79—2, 方詩銘「義和拳（団）与白蓮教是兩個“勢同仇火”的組織」『社会科学輯刊』80—4, 馮士鉢「義和団源流質疑」『社会科学輯刊』80—4。日本における関心・研究との関係については、済南での義和団学術討論会に参加された小林・佐藤両氏の帰国報告が期待される。
- 14) 程獻「從“扶清滅洋”口号看義和団对清王朝的認識」『歴史教学』80—7は農民意識に即して継承性を問題にしており、面白い。
- 15) 劉琳「《義和団在四川的戰闘史料彙編》綜叙」『四川大学学報』79—2, 徐和雍「義和団運動期間浙江寧海王錫桐起義」『杭州大学学報』79—1。関連して、劉其奎「論資産階級对義和団排外問題的評價」『復旦学報』80—5
- 16) 張玉田「应当全面看待義和団運動——談義和団的籠統排外主義」『遼寧大学学報』79—1
- 17) 王志耿・李士良・孫秀仁「黒龍江義和団的抗俄闘争」『学習与探索』80—1, 武育文・韓志峰・劉玉岐「義和団運動在東北」『社会科学輯刊』80—4, 張璇如「可歌可泣的遼海保衛戰——義和団運動中遼寧人民抗俄闘争的光輝一頁」『社会科学輯刊』80—4
- 18) 代表的な論文は、胡繩「義和団興起和失敗」『近代史研究』79—1。封建的落後性、排外主義に染まった旧式農民運動とは言っているが。
- 19) 李侃「義和団運動研究中的幾個問題」『歴史教学』79—2, 左歩青・章鳴九前掲論文, 王致中「封建蒙昧主義与義和団運動」『歴史研究』80—1, 史国瑞「評義和団“反封建”說」『人文雜誌』80—2など。
- 20) 蘇寿桐「試論庚子北京義和団運動」『光明日報』80. 4. 22.
- 21) 孝宗一「山東義和団転進直隸說質疑」『近代史研究』79—1
- 22) 同注14)
- 23) 陳貴宗「義和団的兩個旗号」『社会科学戦線』80—3
- 24) この野原・小林両氏のような見方は注14)の程獻論文と一致するところが多い。
- 25) 廖一仲「論義和団運動時期統治階級中的抵抗派」『天津師院学報』79—3, 同「論清政府与義和団的關係」『歴史研究』80—3
- 26) 楊東梁・王俊義前掲論文, 王致中前掲論文
- 27) 同注26) 及び注19)の李侃論文
- 28) 注3)の丁名楠発言はその一つ。
- 29) 注19)の王致中論文に同じ。
- 30) 王致中「也談如何評價義和団運動——致丁名楠同志」, 丁名楠「關於發言紀要引起的一些意見——答王致中同志」『光明日報』80. 8. 19
- 31) 范文瀾『中国近代史』1945(初版)
- 32) 同注20)
- 33) 『開智録』の論文の全訳・解説は日本では野原四郎氏によってなされている。(『専修史学』1所収論文及び『中国革命と大日本帝国』研文出版社, 1978)
- 34) 中国農民戦争史研究会編『中国農民戦争史研究集刊』第1輯, 1979の諸論文は、最近の農民戦争史研究・論として注目されるが、農民戦争の自然発生性と自覚性の関係を論じたものとしては、謝天佑「論農民戦争的自発性」が総括的である。